

## 私たちの北ヤツ

蓼科山荘・八ヶ岳

山を好きになったのは、北八ヶ岳きたやつを知ったからだだった。

南北に長く延びる八ヶ岳。夏沢峠を境に南側は南八ヶ岳。赤岳あか、硫黄岳いおうと岩々を越えて歩く険しい道が続く。かたや北側の北八ヶ岳は針葉樹の森が広がる穏やかな山域。小さな山小屋が点々とあつて、目的を決めず、のんびりと歩くのにこれ以上いい山はない。

初めて北八ヶ岳を訪れたのは、山の雑誌を作るようになってすぐだった。それまでアウトドアらしい活動を何もしてこなかった私にとって、山岳取材というのは恐ろしいものだった。雑誌の撮影では、立ち止まるのは基本的に撮影するときのみ。軟弱な私は、どうかカメラマンが「ここでちょっと撮りましょう」と言いますようにと、祈りながら歩いた。そこで思いついたのが「山小屋の時間を満喫する」という取材テーマ。当時から何となく「山小屋っていいな」と感じてはいたが、内心ではやはり山小屋がメインの取材なら楽しいやとほくそ笑んでいたのだと思う。そのとき撮影を依頼したのが野川さんだった。

当時、彼女は女性誌など華やかな世界で活躍していたが、山の写真を発表したいと山岳

雑誌の編集部にも顔を出していた。野川さんの山写真は独特だ。山岳雑誌の取材で撮影して来ても、「これじゃどこの山かさつぱりわからないですよ」と編集者が苦笑いすることもあった。それは霽もやに包まれた朝の山で、山肌らしきものはほとんど見えていなかった。

それでも私は彼女の写真が好きだった。

撮影当日は雨だった。登山口に着いてもこんな感じなら、彼女が「延期にする」と言ってくれるだろうとたかをくくっていたのだが、さつと身支度を整えて歩き始めてしまった。

「あのおう、この雨って昼ごろにはやみますかね？」「明日は晴れますよね……」

なんとかして不安を打ち消そうと、前に行く野川さんの背中に呟き続ける。

「さあ、私、気象庁じゃないからねえ」

おっしゃる通り。我ながらじつに面倒くさい編集者だったと思う。

「雨の山も素敵ですよ、とくに北ヤツは」

それは気休めの言葉ではけっしてなくて、後日届いたプリントには雨を受け、その緑をいつそう濃くした森があった。山って面白いな、いいな。そう素直に思えた。

それから私たちは北ヤツに通った。ほとんどの場合は山頂を目指さず、ひっそりした尾根や湖を巡った。山小屋を泊まり歩き、主人たちと酒を飲んだ。それらは雨の山の美しさと同じで、気づかなければ素通りしてしまうさりげない山の魅力だった。私たちは時間を



かけて歩き、観察し、人と話し、興味の赴くままに道や山小屋を繋いで歩いた。山はそれまでよりずっと奥行きをもって広がってゆき、何度歩いても飽きるといことがなかった。困ったことがあるとしたらそれは、どこ的小屋に泊まるかということだった。あそこはしばらくぶりだから、いやあ的小屋もご無沙汰だ。ああ、北ヤツの山小屋が長屋みたいになっていて、一度に全部ハシゴできたらいいのに。実際、歩いて2〜3時間の距離にある小屋なら1泊の日程で4軒ほどは顔を出せる。そんなときはザックに東京土産を満載して行商のような格好で山を歩いた。あるいはプレゼントを配り歩くサンタクロースみたいに。

蓼科山荘は北八ヶ岳の北端、蓼科山の中腹にある小屋だ。ここに泊まるとき、私たちは山小屋のハシゴをしない。主人の米川友基ともきさんは同世代で、北ヤツの山小屋の中では若いオーナーだ。歳が近いせいか話もビールのペースもよく合って、つい飲みすぎてしまう(生ビールのサーバーなんかがあるからなおいけない)。ほかの山小屋まで頑張つて歩こうと思つても、前夜の酒の抜け切らない体では到底無理なのだ。

この日も午後2時くらいに小屋に着くなり、大きなジョッキが出てきた。

「今晚は上の山頂小屋のスタッフも来ると言っていたから、宴会ですね」

やっぱり今回もハシゴは無理ということだ。

蓼科山は十分日帰りできる山だ。必ずしも山小屋に泊まる必要がないので経営は大変だろうが、こういう小屋の夜は楽しい。泊まらなくても困らないのに泊まる人たちは、その小屋のことが心底好きだから。友基さんもそれをよくわかっていて、落語会やきこの教室など、愉快的なイベントを企画して、自分も一緒になって小屋での時間を楽しんでいる。

友基さんは三代目。中山峠にある黒百合くろむぎヒュツテと蓼科山荘を営む父から兄弟それぞれが小屋を受け継いだ。兄が継いだ黒百合は八ヶ岳縦走の要衝となる天狗岳てんぐの中腹にあり、通年客足が途絶えない。かたやこちらは最北端。冬季は休業し、春には雪の中から小屋を掘り出す作業に骨を折る。どう考えても不利な条件の小屋を継いだのは末っ子の宿命か。

「まさか。僕は断然こっちのほうがよかった。もともと兄貴が蓼科山荘に入っていたんですが、黒百合にスライドする形でこっちを譲ってもらったんです」とあっけらかんと言う。「何よりここはのんびりしてるから。自分にはこっちのほうが合ってる」

それに、と付け加えて「八ヶ岳の核心部にある小屋じゃ、お客と一緒にお酒なんて飲んでられないでしょ」と笑っていた。

「コバヤシさん、朝ごはん食べられそう？」

朝、寝室の階段下から友基さんが叫ぶ。結局昨夜もビールから焼酎、日本酒とチャンポンし、どうやって2階の寝室まで上がったのか覚えていない。隣に野川さんの姿はなく、







掛け布団と毛布が几帳面にたたんである。

のろのろと食卓につく。白ごはんと漬物、味噌汁、鯖の塩焼き、とろろ、海苔。ふだん二日酔いの朝はろくにものを食べられないのだが、蓼科山荘の朝ごはんは食べられる。とくにうれしいのはとろろで、これがあればごはんのおかわりだって出る。

このところが毎朝人の手で摺られていると知ったのは、初めて蓼科山荘に泊まったときだったと思う。台所には60センチはあろうかという立派な長芋。これを大人の頭がすっぽり入るほど大きなすり鉢で一気に摺っていく。摺りたてはメレンゲのようにふわーっとしていて甘い。味付けは少しの出汁だけで、小屋番が擦りを担当しても、味見と最後の調整は友基さんがする。

北八ヶ岳の山小屋で、こういう風景を何度も見てきた。一見何気ないことでも、目を凝らすと丁寧な人の仕事があって、大げさな主張をするわけでもなく、当たり前のこととしてそこにある。そんな一切を目にするにつけ、主人たちの心意気に深く感じ入るのだった。

初めて北ヤツを歩いてから10年が経った。私たちは飽きもせず同じような道を登り下りし、同じ山小屋でくだを巻いて、ときにややという発見をしては感極まり、「やつぱり北ヤツっていいなあ」と、今もしみじみ思っている。





蓼科神社  
蓼科山頂

